

台風爪あと／農家の被害を共に悲しむ

谷口吉光（秋田県立大学）

20日未明、台風15号が東北の日本海側を襲った。秋田市内の私の家は、庭の朝顔が塩害と風で黒く焼けたくらいです。翌朝市内を車で回ってみた。広い範囲で停電していたが、建物の被害はほとんど見られなかった。最大瞬間風速41m/sの風くらいでは今の都市基盤はほとんど揺るがないということがよく分かった。

ところが、自然、特に植物は大変な被害を受けた。至る所で街路樹が熱風で焼かれたようになっていた。途中から折れたり倒れたりした木もあった。「農家の被害も大きいだろう」と、知り合いの農家に電話をかけてみた。沿岸部はやはりひどい被害だった。元気な声の人もいたが、意気消沈している人もいた。

農業は自然相手だから、絶えず自然災害につきまといわれる。しかし、「農業の宿命だ」と、ひとつごととして突き放すことは本当は誰にもできないはずだ。なぜならみんな農家の育てた農作物を食べて生きているからだ。

電話をしているうちに、いても立ってもいられなくなったのは妻だった。「私たちには何もできないけど、まず行って見てこよう」。日曜の朝、私たち夫婦は男鹿市、若美町、大潟村を回って、被害農家に会い、話を聞き、写真を撮った。

男鹿の梨は、一番手の幸水の出荷を目前に控えて深刻な被害だという。8割落果したという梨園では、小ぶりのみずみずしい梨が一面を覆っていた。「見るのが怖くて畑に行けない母さんもいる」という農家の言葉を聞き、手塩にかけて育てた作物を一瞬にして失った農家の気持ちを思い、うなずくしかなかった。

若美の農家は、ハウスがいくつつぶれ、残ったハウスもビニールが飛んで中の野菜が塩害を受けた。農家は「若い時にはこういうことがあっても気持ちを切り替えることができたんだけど、年を取るとなかなかねえ」と言っていた。

大潟村では、数ヘクタールの大豆畑が塩害で葉が黒く焼けていた。イネも一面に穂が白く変色していた。「これから米粒が大きく育つ時期なので、どのくらいの被害になるか収穫してみるまで分からない」と農家は不安な様子だった。

都市住民はさまざまな防災システムに守られて暮らしている。しかし、その食料は都市の外側で自然の脅威にさらされながら、農業や漁業者が作っている、ということをおぼえてはならない。ところが現実には農家の被害に関心な人が多い。秋田がダメになってもよそから持ってくればいいと考えるからだろう。実際、スーパーには全国の米や野菜が並んでいる。この状況に安住するのなら、秋田の消費者も東京の消費者と変わらない。

農家の被害を非農家の住民が自分の問題として受け止め、悲しみを共有し、再建を応援する仕組みができないだろうか。それは農業県秋田の住民が農家に対して示す敬意の表れとなり、秋田県民の品格の表れにもなるだろう。なお今回取材した内容の一部は「地産地消を進める会」のホームページに掲載しています。